

<幼児向き>

「さくら」

長谷川 摂子／文 矢間 芳子／絵・構成

福音館書店刊

はる さくらのきは たくさん はなをさ
かせます。なつがきて あきがすぎ ふゆ
になり……そしてまた はなのさくはるが
やってきます。

「おにぎり」

平山 英三／ぶん 平山 和子／え

福音館書店刊

あつあつごはん うめぼし のり。ぎゅ
ぎゅっと にぎって おいしいおにぎりを
つくってみたくになります。

「このはなだれの？」

堀 浩／監修 内山 晟／写真撮影

ひさかたチャイルド刊

このおはな だれのかな？ わかるかな？
おおきなしゃしんで みてみよう。

「じいじのさくら山」

松成 真理子／著

白泉社刊

じいじは うれしいことがあると さくら
をうえてきた。ことしも じいじのつくっ
たさくら山で はるのまつりがはじまるよ。

「おたすけこびととおべんとう」

なががわ ちひろ／文 コヨセ ジュンジ／絵

徳間書店刊

おたすけこびとたちが おべんとうのはい
たつを ひきうけました。トラックにつん
で さあしゅっぱつ！

「はらぺこあおむし」

エリック＝カール／さく もり ひさし／やく

偕成社刊

うまれたばかりの はらぺこあおむし。
びっくりするほど おいしそうなたべも
のを いっしゅうかん もりもり たべ
つづけます。そして おおきく ふとっ
ちよになった あおむしは……。

「おなべおなべにえたかな？」

こいで やすこ／さく

福音館書店刊

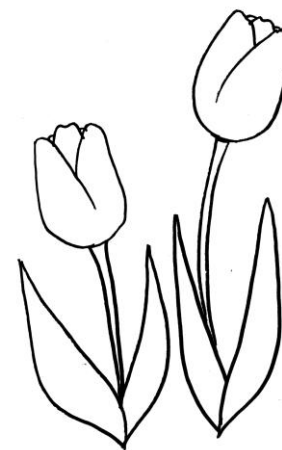
きつねのきっこは おおばあちゃんに お
なべのぼんを たのまれました。コトコト
フツフツ グツグツ……。はるのスープは
どんなあじに なったかな？

「ハサミムシのおやこ」

皆越 ようせい／写真・文

ポプラ社刊

ハサミムシって みたことある？ハサミム
シのおかあさんの こそだては びっくり
することばかりです。



＜低学年向き＞

「うまれたよ！ サンショウウオ」

松沢 陽士／写真・文

岩崎書店刊

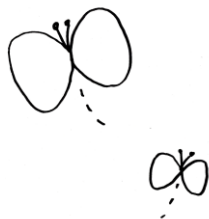
たんぼのみずのなかで、サンショウウオのたまごをみつけたよ。なんどもすがたをかえて、おとなになっていくサンショウウオ。トウキョウサンショウウオをしゃしんでしようかい。

「きいろいばけつ」

もりやま みやこ／作 つちだ よしはる／絵

あかね書房刊

きつねのこが、まるきばしのたもとでみつけたきいろいばけつ。きつねのこは、まえからそんなばけつがほしいとおもっていました。そこできつねのこは……。



「ランドセルがやってきた」

中川 ひろたか／文 村上 康成／絵

徳間書店刊

うみひこくんは、おじいちゃんにもらった青いランドセルをしょって、そとをひとまわり。よっ、いちねんせい！

「あずき」

荒井 真紀／さく

福音館書店刊

あずきは、ちょっとほそながくてまるい、あかいおまめ。ちょうりをする、あんこになる。あずきを土にまいて、あんこになるまでを見てみよう。

「2ひきのかえる」

にいみ なんきち／作 しまだ・しほ／絵

理論社刊

おたがいの^{いろ}色のわるぐちを言ってけんかになった、みどりのかえるときいろのかえる。
「春^{はる}になったら、このけんかのしょうぶをつける」とやくそくして土^{つち}にもぐりました。
やがて春がやってきて……。

「シロツメクサはともだち」

鈴木 純／著

ブロンズ新社刊

だれでも知っている、道ばたの白い花、シロツメクサ。きみはほんとうに、よく知っている？

「お・は・よ・う」

いまむら あしこ／文 ひらさわ ともこ／絵

あすなろ書房刊

「お」は、おひさまの「お」。「は」は、はるかぜの「は」。「よ」は、よしおの「よ」。さて、「う」は……。
「ねえ、このじ、なんてよむの？」

「いえができるまで」

砺波 周平／取材・構成・写真

ひさかたチャイルド刊

ぼくたちのいえができるんだって。いえってどんなふうになっていくのかな？

＜ 中学年向き ＞

「島の子げんたの春休み」

荒尾 美知子／文 福田 岩緒／絵

あすなろ書房刊

瀬戸内海の小島で暮らしている「ぼく」の家に、いとこのゆかがやってきた。「ぼく」とゆかの楽しい春休みの始まりだ。

「本屋さんのルビねこ」

野中 柊／作 松本 圭以子／絵

理論社刊

本に積もったほこりから生まれた、ねこのルビ。飼い主のモシモさんが営む本屋さんの看板ねこになりますが……。

「赤い星のチョウを追え！」

谷本 雄治／文・写真

文研出版刊

プチ生物研究家のぼくが春の公園で見つけたのはヘンな虫。調べてみると、意外な事実が分かってきて……。

「なんでもただ会社」

ニコラ＝ド＝イルシング／作

末松 氷海子／訳 垂石 眞子／絵 講談社刊

三原 紫野／絵 日本標準刊

いたずらずきのティエリーは、ほしいものをなんでもただでくれる会社に、ぐうぜん電話してしまった。うらやましい？うまい話にはご用心……！

「さくら村は大さわぎ」

朽木 祥／作 大社 玲子／絵

小学館刊

子どもが生まれると、さくらの苗木を一本、家の庭に植える約束があるさくら村。この村では、毎日いろんなことが起きるんです。

「春の妖精たち スプリング・エフェメラル」

奥山 多恵子／文・絵

福音館書店刊

「スプリング・エフェメラル」とは、春先に芽を出し、淡い色の花を咲かせる植物のこと。別名「春の妖精」ともよばれる植物たちの一年間を見てみましょう。

「おそうじをおぼえたがらない リスのゲルランゲ」

ジャンヌ・ロッシュ・マゾン／作

山口 智子／やく 堀内 誠一／え

福音館書店刊

末っ子リスのゲルランゲは、ごはんをもらえないことよりも、野宿をすることよりも、オオカミに食べられることよりも、おそうじをおぼえるのがイヤなのです。

とうとう家を追い出されたゲルランゲ、たちまちオオカミにつかまってしまいますが……。

「ぼくは少年鉄道員」

西森 聡／写真・文

福音館書店刊

ドイツには、子どもたちが中心になって運行している鉄道があります。その名は、ベルリン公園鉄道（BPE）。駅長も車掌も機関士もみんな子どもです。

ベルリン公園鉄道で働く子どもたちはどのような仕事をしているのでしょうか？

＜高学年向き＞

「ホタルイカは青く光る」

阿部 秀樹／写真と文

小学館刊

とやまわん めいぶつ
富山湾の春の名物はホタルイカ。この海では、青く発光したホタルイカが海岸に打ち上げられる「ホタルイカの身投げ」という現象が見られます。

ホタルイカの生態を写真と文で紹介します。

「さよならエルマおばあさん」

大塚 敦子／写真・文

小学館刊

病気でもう長くは生きられないと知ったエルマおばあさんとその家族の1年間の記録。

「みどりのゆび」

モーリス・ドリュオン／作 安東 次男／訳

岩波書店刊

自分の指が、不思議な力を持つくみどりのゆび>だと気づいた少年チト。その不思議な力を使って……。

「セカイを科学せよ！」

安田 夏菜／著

講談社刊

日本とロシアをルーツに持つ中学生のミハイル。日本とアメリカをルーツに持つ転校生の葉奈。二人と科学部のメンバーは、生物班の存続をかけて、学校に活動の成果を示すことになるが……。

「江戸を照らせ 蔦屋重三郎の挑戦」

小前 亮／作 中島 花野／画

小峰書店刊

江戸時代の編集者、蔦屋重三郎。貸本屋の重三郎は、本の出版や販売も行っています。様々な才能に出会いながら江戸中・日本中へ絵を届けた蔦屋重三郎の生涯を描きます。

「狐笛のかなた」

上橋 菜穂子／作 白井 弓子／画

理論社刊

となりどうし、あらそいのたえない国。里のはずれにかくれ住む小夜と小春丸は霊狐の野火と出会って……。

「菜の子先生がやってきた！」

富安 陽子／作 YUJI／画

福音館書店刊

どこからともなく学校に現れる不思議な先生、菜の子先生。空飛ぶ本をつかまえたり、うさぎ穴に飛びこんだり、今日も菜の子先生は大活躍！

「いろ（日本のことばずかん）」

神永 暁／監修

講談社刊

日本語には色を表す言葉がとても多いと言われています。色の名前の意味や由来を通して、日本人の豊かな心や思いを感じてみてください。

